

Ⅱ：分担研究報告

研究 8

民間支援団体における回復プログラムの開発研究

令和元年度厚生労働行政推進調査事業補助金
(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)
分担研究報告書

民間支援団体における回復プログラムの開発研究

研究分担者：引土絵未（国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部/
日本学術振興会特別研究員）

研究協力者：喜多村真紀（国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部/
国際医療福祉大学大学院）

岡崎重人（NPO 法人川崎ダルク支援会）

加藤 隆（NPO 法人八王子ダルク）

山本 大（NPO 法人アパリ藤岡ダルク）

山崎明義（特定非営利活動法人東京ダルク）

【研究要旨】

【目的】本研究の目的は、民間支援団体ダルク等において新たに導入されつつある治療共同体エンカウンター・グループの有効性を明らかにすることにある。これまでの研究において、治療共同体エンカウンター・グループは一定の効果が認められているが、対照群が設定されていないという課題が残されていた。そこで、治療共同体エンカウンター・グループを実施していないダルクを対照群として設定することを試み、効果検証を実施した。

【方法】治療共同体エンカウンター・グループを実施する A ダルク（24 名）、B ダルク（23 名）、C ダルク（24 名）の 3 施設（71 名）を介入群、F ダルク（34 名）、G ダルク（6 名）、H ダルク（13 名）、I ダルク（5 名）、J ダルク（6 名）、K ダルク（9 名）の 6 施設（73 名）を対照群とし、介入群では導入時、FU6 ヶ月の 2 時点、対照群では 2018 年 4 月のベースライン、FU6 ヶ月の 2 時点で自記式アンケート調査を実施した。アンケートでは基本属性、利用期間、主たる使用薬物、教育歴、精神科通院の有無、精神的健康を自己実現の観点から測定することを目的とした SEAS2000、自己評価を用いた。計 144 名のうち、調査実施 2 時点でのデータのある介入群 3 施設（51 名）および対照群 3 施設（25 名）の 76 名を分析対象とした。調査実施にあたっては、国立精神・神経医療研究センター倫理委員会の承認を得た（承認番号 A2018-069）。

【結果】性別、年齢、利用期間、主たる使用薬物、教育歴、定期的な精神科通院の有無の基本属性およびベースライン時点での SEAS2000 得点について、介入群 3 施設間・対照群 3 施設間の有意差について確認したところ、有意差が認められなかったため、介入群 3 施設・対照群 3 施設を合算して分析を進めた。次に、基本属性およびベースライン時点での SEAS2000 得点について、二群間比較を実施したところ、年齢及び精神科通院の有無について有意差が認められた。そこで、有意差が認められた項目及びベースライン時点での SEAS2000 得点について傾向スコアによるマッチングを行い（介入群 20 名、対照群 20 名）、ベースラインから FU6 ヶ月の自己実現尺度得点変化における二群間比較を実施した結果、総得点 ($p=0.039, r=0.46$) 及び下位尺度「率直さ」($p=0.040, r=0.46$) において介入群が対照群より有意に得点が増加していた。また、FU6 ヶ月時点の自己実現尺度得点について二群間比較を実施した結果、下位尺度「ありのままの自己肯定」($p=0.036, r=-0.33$) において介入群が対照群に比較し有意に得点が高かった。

自己評価では、介入群では治療共同体エンカウンター・グループについて、対照群ではダルクミ

ーティングについての有用感等の回答を得た。ベースライン時点でのグループに対する評価では、介入群では「そう思う」「全くそう思う」を含め約半数が回復への有用感を得ているのに対し、対照群では8割とより高い有用感を得ていることが示された。

【考察】介入群と対照群における二群間比較を実施した結果、ベースラインからFU6か月のSEAS2000得点変化について、介入群では有意に得点が増加しており、また、FU6か月時点で介入群では有意に得点が高い傾向が認められ、介入群では精神的健康度が高まっていることが示唆された。今回の結果は、治療共同体エンカウンター・グループ自体の効果について支持するものであると考えられる。一方で、グループに対する自己評価では、治療共同体エンカウンター・グループ（介入群）よりダルクミーティング（対照群）に対する回復への有用感が高い傾向が示され、治療共同体エンカウンター・グループでは、有用感を得るまでに一定の期間やグループの成熟などの要素が必要となることが推察された。これらの調査結果は、測定できない施設間の要因を排除することができていない。今後の研究として、同一施設内での介入前後の二群間比較を実施したい。また、インタビュー調査の分析を実施し、量的変数では測定できない治療共同体エンカウンター・グループの意義を明らかにしたい。

A. 研究目的

刑の一部執行制度の施行により、受け入れ先の一つとしてその役割を期待されているのが、民間支援団体ダルクである。ダルクの成果についてはこれまでも挙げられているが、直近のダルク利用者の追っかけ調査の結果によれば、1年半後の利用者（確認の取れた退所者含む）の完全断薬率は約7割¹⁾とされ、非常に高い断薬率が示されている。しかし一方で、当事者コミュニティゆえの困難も指摘されている。利用者の多様化に伴い、ダルク終了後の社会復帰する場の不足やスタッフの確保、利用者の精神症状への対応など支援における課題^{2) 3)}も積み上げられている。

このようなダルクの抱える課題や困難に対して当事者の経験的知識に依拠する伝統的な手法だけではなく、新たな選択肢を提供しようとする動きがある。ワークブックを用いた集団薬物再乱用防止プログラム SMARPP (Serigaya Methamphetamine Relapse Prevention Program)^{4) 5)}などの認知行動療法や当事者研究⁶⁾、そして、治療共同体エンカウンター・グループがその一つである。

治療共同体モデルの特徴は「手法としての共同体」⁷⁾であるとされ、「入所者自身が治療共同体における社会化と治療過程の変化のための媒介者となる」⁷⁾機能の重要性が挙げら

れる。その効果とともに世界各国で展開され、薬物依存症に対する代表的な中長期入所プログラムとして位置づけられることとなった⁸⁾。治療共同体エンカウンター・グループは、治療共同体モデルで実施されるグループワークの一つであり、治療共同体モデルの重要かつ基盤となる要素（共感と責任のある関係、現実と向き合う機会、絶対的な誠実さ、個人の変化に不可欠な自己覚知）によって構成されており、それゆえに、治療共同体モデルにおいて象徴的なグループとされている⁷⁾。

治療共同体エンカウンター・グループの特徴はメンバーシップフィードバックにあり、話題提供者に対し参加者全員で安全な質問とフィードバックによりサポートする。

報告者らは、2013年よりダルクでの治療共同体エンカウンター・グループの導入を開始し、2020年2月時点で12施設において実践されている。また、2014年より治療共同体研究会を隔月開催し、治療共同体エンカウンター・グループの基礎的な知識・技術を提供するための講義や体験グループなどを実施してきた。また、治療共同体エンカウンター・グループの普及を目的に、研修やワークショップを開催している。

これらの治療共同体エンカウンター・グループの効果検証として、2013年よりAダルク、

2014年よりBダルク、2015年よりCダルクにて治療共同体エンカウンター・グループを導入すると同時に、自己実現尺度 SEAS2000⁹⁾を用いた自記式アンケート調査を実施してきた^{10) 11)}。その結果、治療共同体エンカウンター・グループ参加から半年後の効果が認められた一方で、長期的な効果については明らかにならなかった。

これまでの研究の大きな課題として、施設内で対照群を設定することができないため、ダルクでの既存のプログラムにおける効果の影響を排除できないという課題が残されていた。その背景として、介入群のダルクは小規模であること、また規模の大きなダルクでも、治療共同体エンカウンター・グループに参加するメンバーは、グループの適用に合わせた選抜メンバーであり、施設内で等質な対照群を設定することが困難であることが挙げられた。そのため、本研究では昨年度より治療共同体エンカウンター・グループ準備期間にあるダルクを対照群として設定することを試み、治療共同体エンカウンター・グループの有効性を検証してきた。

B. 研究方法

1. 対象者

治療共同体エンカウンター・グループを実施するA・B・Cダルクにて定期的に治療共同体エンカウンター・グループに参加する利用者72名を介入群とした。また、F・G・H・I・J・Kダルク利用者73名を対照群とし、計148名を対象に自記式アンケート調査を実施した。対照群の選定においては、治療共同体エンカウンター・グループ導入に関心を持ち、報告者の主催する治療共同体研究会に参加したダルクに対し、調査の説明を実施し、同意を得られた施設を調査対象とした。

続いて、148名のうち調査実施2時点でのデータのある介入群(51名)および対照群(25名)の76名を分析対象とした。調査対象除外となった介入群22名、対照群58名については、対照群のうち45名(3施設)はグループ

導入により調査対象外となり、その他は、中途退所・施設移動・就労などのほかのプログラムへの移行などの理由が挙げられる。

2. 調査方法

1) 調査項目(右上ある方が見やすい)

調査項目は、年齢、性別、利用期間、入所の契機となった主たる使用薬物、最終教育歴、精神科通院の有無、自己実現尺度 SEAS2000、グループの自己評価である。自己実現尺度 SEAS2000 は、精神的健康を自己実現の観点から測定することを目的とした POI (Personal Orientation Inventory) をもとに、心理学領域で広く展開されるエンカウンター・グループの効果測定尺度として開発された SEAS (Self-Actualization Scale) の改訂版である。SEAS2000 は4因子(「ありのままの自己肯定」「とらわれからの解放」「自己信頼」「率直さ」)24項目で構成され、「はい」「どちらともいえない」「いいえ」の3件法となっている。

本研究では、物質使用障害からの回復という視座によるダルク全体の効果ではなく、治療共同体エンカウンター・グループを通じた変化という視座によるグループの効果を重視し、エンカウンター・グループに特化した尺度が適切であると判断した。

グループに対する自己評価として、介入群では治療共同体エンカウンター・グループ、対照群ではダルクミーティングに対し7つの項目について、「全くそう思わない」から「全くそう思う」の5件法にて回答を得た。

2) 実施方法および倫理的配慮

介入群では、Aダルク(2013年4月～)、Bダルク(2014年4月～)、Cダルク(2015年10月～)において週1回程度1時間半～2時間治療共同体エンカウンター・グループを実施し、継続的に治療共同体エンカウンター・グループに参加する利用者・研修スタッフに対し、導入時・FU6ヵ月の2時点において自記式アンケート調査を実施した。

対照群では、2018年4月をベースラインと

し、FU6ヶ月の2時点において調査を実施した。介入群・対照群ともに調査票を配布し、臨床研究に関する倫理指針等に基づき、人権の擁護、インフォームド・コンセント、研究参加による個人への不利益がないことを書面にて説明し、同意を得られた参加者を対象者とした。

また、施設への治療共同体エンカウンター・グループ導入に際しては、ダルクがセルフヘルプコミュニティであるという特性を尊重し、研究を前提とした調査依頼を実施していない。施設から治療共同体エンカウンター・グループ導入希望があった場合のみ、グループ導入および調査についての説明を実施し、同意を得られた場合に調査を実施した。

本研究は国立精神・神経医療研究センター倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号A2018-069）。

3) 分析方法

まず、ベースラインの各調査対象施設の基本属性変数の記述統計を算出し、各施設間の基本属性についての有意差の有無を確認した。続いて、介入群と対照群間の基本属性の有意差の有無を確認した。年齢及び精神科通院の有無について二群間に有意差が認められたため、傾向スコアにより二群間のマッチングを実施し、各群のベースラインからFU6か月時点のSEAS2000の得点変化について、Wilcoxon符号付き順位検定にて確認した。

次に、グループに対する自己評価について、中央値を算出し二群間比較を実施した。

なお、統計学的解析にはSPSS for Windows version24を用い、両側検定にて $P<0.05$ を有意水準とした。

C. 研究結果

1. 対象施設の基本属性について

各対象施設の概要および基本属性を表1、2に示す。介入群51名では、性別は全員が男性、年齢の中央値（四分位）は37（29,43）歳であった。利用期間は1～3年が19名（37.3%）

と最も多く、続いて6ヶ月未満が16名

（37.3%）、3年以上が9名（17.6%）、6ヶ月～1年が7名（13.7%）であった。入所の契機となった主たる使用薬物は、覚せい剤が30名（58.8%）と最も多く、続いて鎮咳剤、アルコール、大麻、処方薬などを含むその他8名（15.7%）、危険ドラッグ7名（13.7%）、複数回答6名（11.8%）であった。教育歴については、中学校卒業が22名（44.9%）と最も多く、続いて高校卒業が13名（26.5%）、大学卒業10名（20.4%）、その他4名（8.2%）であった。定期的な精神科通院の有無については、27名55.1%が定期的に精神科通院をしていた。

対照群3施設25名では、性別は全員が男性、年齢の中央値（四分位）は42（34,47.5）歳であった。利用期間は1～3年が9名（37.5%）と最も多く、続いて3年以上8名（33.3%）、6ヶ月未満4名（16.7%）、6ヶ月～1年が3名（12.5%）であった。入所の契機となった主な使用薬物は、覚せい剤が16名（64.0%）と最も多く、続いて処方薬、アルコール、鎮咳剤などを含むその他が6名（24.0%）、危険ドラッグ3名（12.0%）であった。教育歴については、中学校卒業が13名（52.0%）と最も多く、続いて高校卒業6名（24.0%）、大学卒業3名（12.0%）とその他が3名（12.0%）であった。定期的な精神科通院の有無については、21名84.0%が定期的に精神科通院をしていた。

続いて、介入群・対照群における各施設間の基本属性についての有意差を確認したところ、介入群の教育歴について有意差（ $p=0.03$ ）が認められたが、メインアウトカムである自己実現尺度（ベースライン時点）では有意差が認められなかつたため、介入群3施設・対照群3施設を合算して分析を進めた。

次に、介入群と対照群間の基本属性についての有意差を確認したところ、年齢（ $p=0.018$ ）、定期的な精神科通院の有無（ $p=0.02$ ）について有意差が認められた（表3）。二群間の年齢、精神科通院の有無、および対象者の差異のメインアウトカムへの影響を考慮し、年齢、精神科通院の有無、ベースライン時点での自己

実現尺度得点について傾向スコアを算出し、二群間の基本属性変数をマッチングした（介入群 20 名、対照群 20 名）（表 4）。

2. 介入群・対照群におけるベースラインから FU6 ヶ月の SEAS2000 得点変化

介入群、対照群におけるベースラインから FU6 ヶ月の自己実現尺度得点の変化について Wilcoxon 符号付き順位検定にて確認した結果を表 5 に示す。

介入群の自己実現尺度得点中央値（四分位）では、総得点において有意差が認められ、ベースライン 21（17.25,27.5）点から FU6 ヶ月 26.5（19.25,28）点と得点が上昇していた（ $p=0.039$ ）。また下位尺度「率直さ」についても有意差が認められ、ベースライン 7（6,8）点から FU6 ヶ月 9（5.25,9.75）点へと得点が上昇していた。

一方対照群では、総得点についてはベースライン 21（17.25,23）点から FU6 ヶ月 20（18,23.25）点と大きな変化はなく、有意差は認められなかった。

3. FU6 ヶ月時点の SEAS2000 得点について二群間比較

FU6 ヶ月の自己実現尺度得点について Kruskal-Wallis 検定にて二群間比較を実施した結果を表 6 に示す。

自己実現尺度総得点中央値（四分位）について、介入群は 26.5（19.25,28）点、対照群 20（18,23.25）点であり、有意差は認められなかった（ $p=0.063$ ）が、小程度の効果量が認められた（ $r=0.29$ ）。また、下位尺度「ありのままの自己肯定」得点中央値（四分位）において、介入群 5.5（4,8.75）点、対照群 4（2,5）点であり、二群間に有意差（ $p=0.036$ ）と中程度の効果量（ $r=0.33$ ）が認められた。

4. グループに対する自己評価

自己評価に関する 7 つの項目の結果を図 1-4 に示す。
ベースライン時点でのグループに対する評

価では、「エンカウンター・グループ/ダルクミーティングが自身の回復に役立っていると思う」という設問において、介入群では約半数が「そう思う」「全くそう思う」と回復への有用感を得ているのに対し、対照群では 8 割とより高い有用感を得ていること傾向が示された。次に、FU6 ヶ月時点でのグループに対する評価では、「エンカウンター・グループ/ダルクミーティングが自身の回復に役立っていると思う」という設問において、介入群では約 6 割が回復への有用感を感じておりベースライン時点よりやや上昇しているのに対し、対照群では約 9 割をより高い有用感を得ている傾向が示された。これらの傾向について、二群間の有意差（Pearson のカイ二乗検定）および各群におけるベースライン時点から FU6 ヶ月での得点変化（Wilcoxon 符号付き順位検定）による有意差は認められなかった。

D. 考察

本研究では、民間支援団体ダルクにおける回復プログラムとして、治療共同体エンカウンター・グループに着目し、対照群を設定することを試み、その効果について検証した。対照群の設定においては、治療共同体エンカウンター・グループ準備期間中の施設を対象としたが、その選定においては、ダルクがセルフヘルプコミュニティであるという特性を尊重し、研究を前提とした導入・調査依頼を実施していない。そのため、介入群は関東圏であるのに対し、対照群は西日本が多くなっており、地域性に偏りが見られた。そこで、年齢、入所期間、主たる使用薬物、教育歴、精神科通院の有無の基本属性変数を用いて二群間の偏りについて確認し、傾向スコアによりマッチング（介入群 20 名、対照群 20 名）をおこなった。

介入群と対照群の二群間比較では、自己実現尺についてベースラインから FU6 か月の得点変化において、総得点（ $p=0.039, r=0.46$ ）及び下位尺度「率直さ」（ $p=0.040, r=0.46$ ）において介入群が対照群より有意に得点が増

してしており、また、FU6ヶ月時点の自己実現尺度得点について二群間比較を実施した結果、下位尺度「ありのままの自己肯定」($p=0.036, r=-0.33$)において介入群が対照群に比較し有意に得点が高く、介入群では精神的健康度が高まっていることが示唆された。これまでの前後比較による研究で認められた効果は、治療共同体エンカウンター・グループ以外の影響が排除しきれない課題が残されていたが、本調査結果は、治療共同体エンカウンター・グループ自体の効果について支持する1つの結果であると考えられる。

一方で、治療共同体エンカウンター・グループ/ダルクミーティングに対する自己評価では、治療共同体エンカウンター・グループ(介入群)よりダルクミーティング(対照群)に対する回復への有用感が高い傾向が示された。この背景として、治療共同体エンカウンター・グループは非常に独自性の高い言語的コミュニケーションを基盤とした取り組みであることから、回復への有用感を自覚しにくい側面が推察される。治療共同体エンカウンター・グループ参加者に対するインタビュー調査でも、「初めのころ、4カ月目ぐらいは、『またエンカウンターか、なにしゃべるの』と言ってた」「いいもんだなってなってから、自分にも仲間にも必要なんだと思うようになった」と語られるように、グループの有用感を得るまでに一定の期間やグループの成熟などが必要であると考えられる。

以上の調査結果には以下の限界が挙げられる。本調査で確認した二群間の変数以外にも、二群間の差異に影響を及ぼす要因が想定される。施設規模、スタッフ数、スタッフの経験年数、メンバー間の関係など測定していない、または測定することができない変数の影響については本研究では検証することができていない。これらの課題は、観察研究の限界であると考えられるが、今後より適切かつ実現可能な調査デザインを検討する必要がある。その1つは、同一施設内で、治療共同体エンカウンター・グループの未実施期間と実施期間の得

点変化の差異を検証する方法である。

今後、以上の調査方法も含め、さらにデータを蓄積し分析を進めていきたい。また、本調査を含め、量的変数では測定できない治療共同体エンカウンター・グループの意義を明らかにすることを目的に、インタビュー調査を実施しており、今後分析を進めていきたい。

E. 結論

本研究では、民間支援団体ダルクにおける回復プログラムとして、新たに導入されつつある治療共同体エンカウンター・グループに着目し、対照群を設定し効果を検証した。治療共同体エンカウンター・グループを実施するダルク3施設を介入群とし、治療共同体エンカウンター・グループに関心があり未実施のダルク3施設を対象群として、性別、年齢、利用期間、主たる使用薬物、教育歴、定期的な精神科通院の有無の基本属性について、傾向スコアによるマッチングし、二群間比較を実施した。

ベースラインからFU6ヶ月のSEAS2000得点変化について、対照群では大きな変化が見られないのに対し、介入群では有意に得点が増加しており、また、FU6ヶ月時点の自己実現尺度得点について二群間比較を実施した結果、下位尺度「ありのままの自己肯定」において介入群が対照群に比較し有意に得点が高く、介入群では精神的健康度が高まっていることが示唆された。これは、治療共同体エンカウンター・グループ自体の効果について支持する1つの結果であると考えられる。一方で、グループに対する自己評価では、治療共同体エンカウンター・グループ(介入群)よりダルクミーティング(対照群)に対する回復への有用感が高い傾向が示され、治療共同体エンカウンター・グループでは、有用感を得るまでに一定の期間やグループの成熟などの要素が必要となると考えられた。

これらの調査結果は測定できない施設間の要因を排除することができていないため、今後の研究として、同一施設内での二群間比較

など新たな調査デザインを検討していく必要がある。また、インタビュー調査の分析も含め、治療共同体カウンター・グループの意義を明らかにしていきたい。

F. 参考文献

- 1) 嶋根卓也,近藤あゆみ, 米澤雅子, 近藤恒夫, 松本俊彦: 民間支援団体利用者のコホート調査と支援の課題に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業(精神障害分野) 刑の一部執行猶予下における薬物依存者の地域支援に関する政策研究. 平成 29 年度総括・分担研究報告書, 2018.
- 2) 嶋根卓也, 森田展彰, 末次幸子, 岡坂昌子: 薬物依存症者による自助グループのニーズは満たされているか—全国ダルク調査から—日本アルコール・薬物医学会雑誌 41, 100-107, 2006.
- 3) 特定非営利活動法人東京ダルク平成 21 年度社会福祉推進費補助金事業実施報告書 依存症回復途上者の社会復帰に向けての就労・就学支援事業.2010.
- 4) 小林桜児, 松本俊彦, 大槻正樹, 遠藤桂子, 奥平謙一, 原井宏明, 和田清: 覚せい剤依存症患者に対する外来再発予防プログラムの開発 —Serigaya Methamphetamine Relapse Prevention Program (SMARPP) —. 日本アルコール・薬物医学会雑誌, 4, 507-521, 2007.
- 5) 松本俊彦: 薬物依存症に対する新たな治療プログラム「SMARPP」司法・医療・地域における継続した支援体制の構築を目指して. 精神医学, 54, 1103-1110, 2012.
- 6) 上岡陽江: 女性薬物依存症者の当事者研究. 臨床心理学増刊第 9 号みんなの当事者研究, 109-114, 2017.

- 7) De Leon,G.: The therapeutic community: theory,model,and method. Springer,2000.
- 8) NIDA: Therapeutic communities. NIDA Research Report Series, 15-4877,2015.
- 9) 坂中正義: 改訂版自己実現スケール (SEAS2000) 作成の試み. 福岡教育大学紀要, 52, 181-188, 2003.
- 10) 引土絵未, 岡崎 重人, 山崎明義, 松本俊彦: 日本型治療共同体モデルの試行と効果について. 日本アルコール・薬物医学会雑誌, 50, 206-221, 2014.
- 11) 引土絵未, 岡崎重人, 加藤隆, 山本大, 山崎明義, 松本俊彦: 治療共同体エンカウンター・グループの効果とその要因について: 日本アルコール・薬物医学会雑誌, 53 (2), 83-94, 2018.

G. 研究発表

1. 論文発表
なし
2. 学会発表
1) 引土絵未, 岡崎重人, 加藤隆, 山本大, 山崎明義, 松本俊彦, 嶋根卓也: 民間回復支援施設における治療共同体エンカウンター・グループの効果について. 2019 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 札幌コンベンションセンター, 2019.10.5.

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

- 1.特許取得
なし
- 2.実用新案登録
なし
3. その他
なし

表1 介入群における各施設基本属性

介入群		A (n=14)	B (n=15)	C (n=22)	全体 (n=51)	
地域		関東	関東	北関東		
中央値 (四分位数)					p	
年齢		36 (24.75,44)	39 (33,43)	33.5 (30,41)	37 (29,43)	0.715
自己実現尺度		22.5 (18.75,26)	21 (13,25)	22.5 (16.75,30.5)	22 (17,27)	0.591
n (%)						
性別	男性	14 (100)	15 (100)	22 (100)	51 (100)	—
利用期間	6か月未満	8 (57.1)	6 (40.0)	2 (9.1)	16 (31.4)	0.082
	6か月～1年	2 (14.3)	2 (13.3)	3 (13.6)	7 (13.7)	
	1～3年	3 (21.4)	4 (26.7)	12 (54.5)	19 (37.3)	
	3年以上	1 (7.1)	3 (20.0)	5 (22.7)	9 (17.6)	
主たる対象薬物	覚せい剤	7 (50.0)	9 (60.0)	14 (63.6)	30 (58.8)	0.522
	危険ドラッグ	1 (7.1)	3 (20.0)	3 (13.6)	7 (13.7)	
	その他	3 (21.4)	3 (20.0)	2 (9.1)	8 (15.7)	
	複数回答	3 (21.4)	0 (0)	3 (13.6)	6 (11.8)	
教育歴	中学卒	11 (78.6)	8 (57.1)	3 (14.3)	22 (44.9)	0.03*
	高校卒	3 (21.4)	4 (28.6)	6 (28.6)	13 (26.5)	
	大学卒	0 (0)	1 (7.1)	9 (42.9)	10 (20.4)	
	その他	0 (0)	1 (7.1)	3 (14.3)	4 (8.2)	
通院 精神科	有	8 (57.1)	9 (64.3)	10 (47.6)	27 (55.1)	0.614
	無	6 (42.9)	5 (35.7)	11 (52.4)	22 (44.9)	

Pearson カイ二乗検定, Kruskal-Wallis 検定

* p<0.05

表2 対照群における各施設基本属性

対照群	H (n=13)	J (n=6)	K (n=6)	全体 (n=25)		
地域	中国	九州・沖縄	九州・沖縄			
	中央値 (四分位数)				p	
年齢	42 (34,46.5)	37 (28.5,43.25)	53 (39.25,57.75)	42 (34,47.5)	0.073	
自己実現尺度	23 (17.5,26)	19.5 (16.75,21.25)	25 (16.5,26.5)	22 (18,25.5)	0.267	
	n (%)					
性別	男性 13 (100)	6 (100)	6 (100)	25 (100)	-	
利用期間	6か月未満	1 (8.3)	1 (16.7)	2 (33.3)	4 (16.7)	0.471
	6か月～1年	2 (16.7)	0 (0)	1 (16.7)	3 (12.5)	
	1～3年	4 (33.3)	2 (33.3)	3 (50.0)	9 (37.5)	
	3年以上	5 (41.7)	3 (50.0)	0 (0)	8 (33.3)	
主たる使 用薬物	覚せい剤	9 (69.2)	2 (33.3)	5 (83.3)	16 (64.0)	0.304
	危険ドラッグ	1 (7.7)	1 (16.7)	1 (16.7)	3 (12.0)	
	その他	3 (23.1)	3 (50.0)	0 (0)	6 (24.0)	
	複数回答	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	
教育歴	中学卒	8 (61.5)	2 (33.3)	3 (50.0)	13 (52.0)	0.436
	高校卒	3 (23.1)	1 (16.7)	2 (33.3)	6 (24.0)	
	大学卒	2 (15.4)	1 (16.7)	0 (0)	3 (12.0)	
	その他	0 (0)	2 (33.3)	1 (16.7)	3 (12.0)	
通院 精神科	有	9 (69.2)	6 (100)	6 (100)	21 (84.0)	0.111
	無	4 (30.8)	0 (0)	0 (0)	4 (16.0)	

Pearson カイ二乗検定, Kruskal-Wallis 検定

表3 介入群・対照群における基本属性の二群間比較

		介入群 (n=51)	対照群 (n=25)	全体 (n=76)	
		中央値 (四分位数)			p
年齢		37 (29,43)	42 (34,47.5)	38 (30,25,43)	0.018*
自己実現尺度		22 (17,27)	22 (18,25.5)	22 (17,25,26)	0.698
		n (%)			
性別	男性	51 (100)	25 (100)	76 (100)	-
利用期間	6か月未満	16 (31.4)	4 (16.7)	20 (26.7)	0.374
	6か月～1年	7 (13.7)	3 (12.5)	10 (13.3)	
	1～3年	19 (37.3)	9 (37.5)	28 (37.3)	
	3年以上	9 (17.6)	8 (33.3)	17 (22.7)	
主たる薬物	覚せい剤	30 (58.8)	16 (64.0)	46 (60.5)	0.298
	危険ドラッグ	7 (13.7)	3 (12.0)	10 (13.2)	
	その他	8 (15.7)	6 (24.0)	14 (18.4)	
	複数回答	6 (11.8)	0 (0)	6 (7.9)	
教育歴	中学卒	22 (44.9)	13 (52.0)	35 (47.3)	0.767
	高校卒	13 (36.5)	6 (24.0)	19 (25.7)	
	大学卒	10 (20.4)	3 (12.0)	13 (17.6)	
	その他	4 (8.2)	3 (12.0)	7 (9.5)	
精神科通院	有	27 (55.1)	21 (84.0)	48 (64.9)	0.02*
	無	22 (44.9)	4 (16.0)	26 (35.1)	

Pearson カイ二乗検定, Mann-Whitney の U 検定

* p<0.05

参考：ベースラインからFU6ヶ月の自己実現尺度得点変化における二群間比較（マッチング前）

	介入群 (n=51)					対照群 (n=25)				
	ベース ライン	FU6ヶ 月	z	r	p	ベース ライン	FU6ヶ 月	z	r	p
	中央値 (四分位数)					中央値 (四分位数)				
自己実 現尺度 総得点	22 (17,27)	26 (20,29)	-3.17 3	0.44 中	0.002 **	22 (18,25. 5)	20 (18.5,24. 5)	-0.31 4	0.06	0.754
ありの ままの 自己肯 定	5 (2,8)	5 (4,8)	-3.14 6	0.44 中	0.002 **	3 (1,5)	4 (2.5,6)	-1.45 3	0.29	0.146
とらわ れから の解放	5 (3,7)	6 (4,7)	-1.69 5	0.24	0.090	5 (4,6)	5 (3.5,7)	-0.51 0	0.10	0.610
自己信 頼	6 (4,7)	6 (4,8)	-2.23 3	0.31 中	0.026 *	6 (3,7.5)	5 (4,6.5)	-0.59 6	0.12	0.551
率直さ	7 (6,8)	7 (5,9)	-1.23 2	0.17	0.218	8 (6,9)	7 (5,9)	-0.55 0	0.11	0.550

Wilcoxon 符号付き順位検定

** p<0.01 * p<0.05

表4 傾向スコア調整後介入群・対照群における基本属性の二群間比較

		介入群 (n=20)	対照群 (n=20)	全体 (n=40)	
		中央値 (四分位数)			p
年齢		39 (32.25,43)	37 (34,44.5)	39 (33.25,43)	0.862
自己実現尺度		21 (17.25,27.5)	21 (17.25,23)	21 (17.25,25.75)	0.659
		n (%)			
性別	男性	20 (100)	20 (100)	40 (100)	-
利用期間	6か月未満	8 (40.0)	3 (15.8)	11 (28.2)	0.248
	6か月～1年	3 (15.0)	2 (10.5)	5 (12.8)	
	1～3年	6 (30.0)	7 (36.8)	13 (33.3)	
	3年以上	3 (15.0)	7 (36.8)	10 (25.6)	
主たる薬物	覚せい剤	12 (60.0)	11 (55.0)	23 (57.5)	0.371
	危険ドラッグ	1 (5.0)	3 (15.0)	4 (10.0)	
	その他	5 (25.0)	6 (30.0)	11 (27.5)	
	複数回答	2 (10.0)	0 (0)	2 (5.0)	
教育歴	中学卒	5 (25.0)	10 (50.0)	15 (37.5)	0.340
	高校卒	6 (30.0)	5 (25.0)	11 (27.5)	
	大学卒	7 (35.0)	3 (15.0)	10 (25.0)	
	その他	2 (10.0)	2 (10.0)	4 (10.0)	
精神科通院	有	16 (80.0)	16 (80.0)	32 (80.0)	1.000
	無	4 (20.0)	4 (20.0)	8 (20.0)	

Pearson カイ二乗検定, Mann-Whitney の U 検定

表5 傾向スコア調整後ベースラインからFU6ヶ月の自己実現尺度得点変化における二群間比較

	介入群 (n=20)					対照群 (n=20)				
	ベース ライン	FU6ヶ 月	z	r	p	ベース ライン	FU6ヶ 月	z	r	p
	中央値 (四分位数)					中央値 (四分位数)				
自己実 現尺度 総得点	21 (17.25,2 7.5)	26.5 (19.25, 28)	-2.065	0.4 6 中	0.039 *	21 (17.25, 23)	20 (18,23. 25)	-0.14 2	0.03	0.887
ありの ままの 自己肯 定	5.5 (1.25,8. 75)	5.5 (4,8.7 5)	-1.284	0.2 9	0.199	3 (1,5)	4 (2,5)	-1.27 5	0.29	0.202
とらわ れから の解放	5 (3,6)	5.5 (4,7)	-0.192	0.0 4	0.848	5 (5,6.75)	5 (3.25,7)	-0.63 4	0.14	0.526
自己信 頼	4 (3.25,6)	5 (4,7.7 5)	-1.323	0.3 0	0.186	5 (3,7)	5 (4,6)	-0.42 4	0.10	0.672
率直さ	7 (6,8)	9 (5.25, 9.75)	-2.057	0.4 6 中	0.040 *	7 (5.25,9)	7 (5,9)	-0.39 6	0.09	0.692

Wilcoxon 符号付き順位検定

* p<0.05

表6 傾向スコア調整後FU6ヶ月の自己実現尺度得点の二群間比較

	介入群 (n=20)	対照群 (n=20)	z	r	P
	中央値 (四分位数)				
自己実現尺度総得点	26.5 (19.25,28)	20 (18,23.25)	-1.85	-0.29 (小)	0.063
ありのままの自己肯定	5.5 (4,8.75)	4 (2,5)	-2.09	-0.33 (中)	0.036*
とらわれからの解放	5.5 (4,7)	5 (3.25,7)	-0.178	-0.03	0.859
自己信頼	5 (4,7.75)	5 (4,6)	-0.564	-0.09	0.573
率直さ	9 (5.25,9.75)	7 (5,9)	-0.902	-0.14	0.367

Kruskal-Wallis 検定

* p<0.05

図1 ベースライン時点における治療共同体エンカウンター・グループに対する評価（介入群）

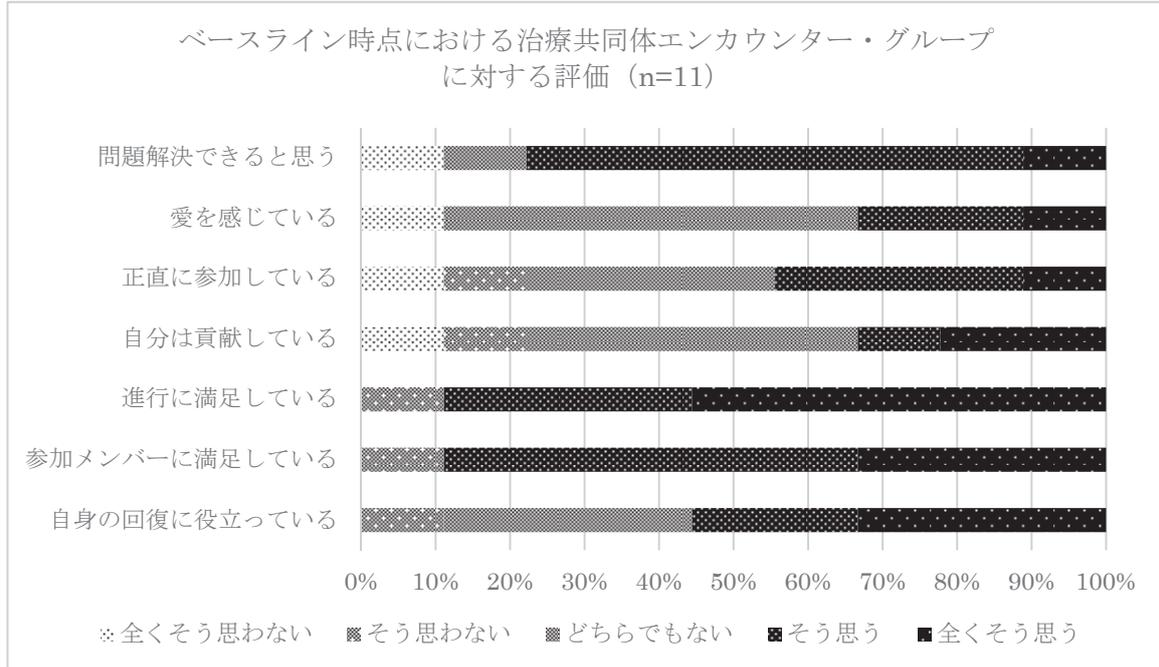


図2 ベースライン時点におけるダルクミーティングに対する評価（対照群）

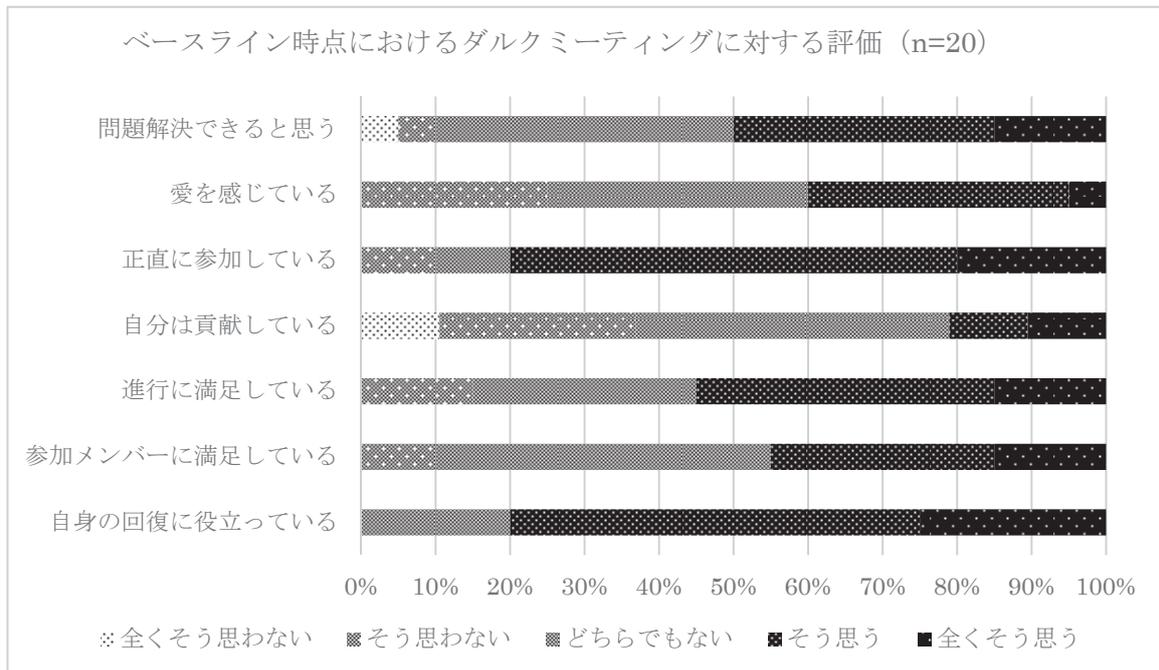


図3 FU6ヶ月時点における治療共同体エンカウンター・グループに対する評価（介入群）

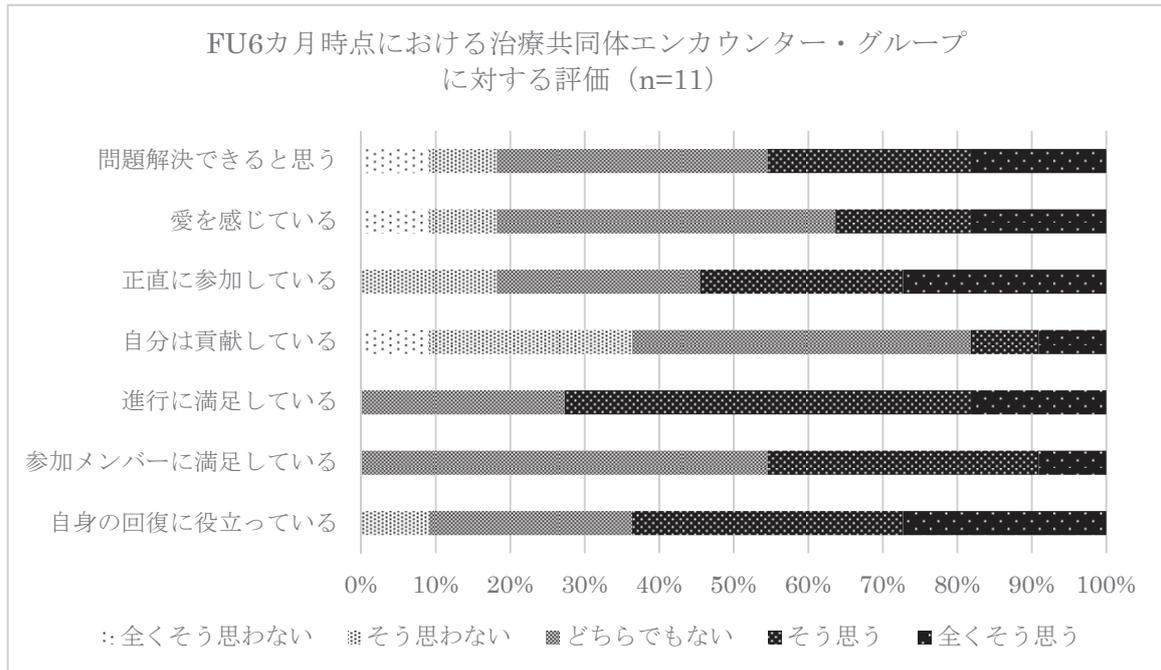


図4 FU6ヶ月時点におけるダルクミーティングに対する評価（対照群）

